
不真面目偽々戦争

誇大紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不真面目偽々戦争

【Nコード】

N6259N

【作者名】

誇大紫

【あらすじ】

この国は千年以上戦っている。そんなに長いこと戦ってきたものだから、何が「敵」でどうすれば「勝ち」なのか誰にもわからなくなっている。それでも日常は続いていくし、軍人もいるし。何もかもが曖昧な戦争を描く短編連作。

かくれんぼ（前書き）

実際、今あなたが暮らしてる世界だって、戦争の後部地域に過ぎないでしよう？

かくれんぼ

それは例えるならかくれんぼだよ。いつ終わるのか決めずに始めてしまったから、最後の一人が見つかるまで終われない。でも巧妙に隠れ、風景に馴染んでしまった君はもう全く見つからないんだ。さらに困ったことに途中参加も認めているから全体数もわからない。参った。

鬼がそう叫んだとしても、参ったと言えば終了というルールなど決めていなかったから、のこのこ出ていくと捕まる　鬼の罠かもしれない。

そうして辺りは暗くなり、やがて一人ぼっちになった時に君は思う。

もう終わっているんじゃないか。さっきの「参った」で実は終了して鬼は帰ってしまったっているんじゃないか。しかし君は終わることができない。

皆がそれぞれ鬼のいないかくれんぼを続けている。見つけてもらえるまでもういいよと言いつける。

ここは、そんな場所だ。

今、この国は戦争中である。千年以上続いているらしい恒常的な戦争はそもそも何が原因で始まったのか今ではよくわからないが。女子高生の妹が使う教科書を見せてもらったが、曖昧な書き方で誰と戦っているのかどうすれば勝ちなのか負けなのかさえはっきりしない。ただひたすら進歩してきた闘い方の歴史がそこには並んでいる。

平安京の時代には穴を掘って敵を埋め殺したらしい。刀を使うようになると、町人に化けた敵を切り捨て御免で殺したそうさ。現代では家に引きこもって首筋から柔らかい管を挿入すると、別の身体

に意識を投入できる。それを使って町をあるけば、人々に化けた敵がすぐにわかる。顔の上にアニメ調のオニマークが出るのだ。

オニは速やかに処分しなければなりません。

教科書にはそうある。だから見つけたらすぐに発砲しなければならぬ。

コンビニで立ち読みしていると前触れもなしにヒュツと音がして横の婆さんの黄色い脳みそが床に散る。皆チラリと見て雑誌に戻る。サイレンサー付き銃で撃ったのはポニーテールのカワイイ店員で、どうやら操作されているボディらしい。正体はわからない。間もなく掃除ロボットが片付けにやってきて跡形もなく　臭いは粒子ごと吸い取って綺麗になる。

引きこもりの人間はそうやって軍人として仕事をしている。俺もその一人だ。ただ、これは言ってみれば人々からは汚れた仕事とされていて体裁がすごく悪い。国から委託されてはいるが公務員でもない。敵がいなくなったらなくなる仕事だ。

しかし千年も前から敵がいなくなったことはないからきつと大丈夫だろう。或いは敵はもういないのかもしれない。この仕事がなくになると総計で二十代三十代の半分が無職状態という事態が発生するので、敵は作り出されているのかもしれない。

俺は今日も仕事に出る。ゴミだらけの部屋に置いた座イスに身体を預け、視界は一気に町の倉庫内になる。隣には誰かの持ち物なのだろう、大量のボディがショーウィンドウのマネキンのように並んでいる。

俺のもう一つの身体は三十代の女性だ。いかにも疲れてきて寿退社したい年頃という雰囲気、まず目立ちにくいし警戒されにくい。準備運動をしてスーツを着る。久しぶりの外だ。町を適当にぶらつき、タコ焼き屋を見つけて食う。歯に青海苔がつくかもしれないしソース臭いかもしれないが知るか。俺はかつてそんな女を見たことがある。中身までは知らないが。

駅前で急ぐ女子高生を見つけた。オニマークが顔に付いている。

俺は切符を買って女を尾行する。このボディは女性専用車両にも乗れるから敵を追いやすい。

ただ身体に似合った靴が軒並み走りづらいせいで走行スピードは遅いのだ。気づかれないよう近づいて確実に当たる距離で撃たなければならぬ。

女と同じ駅で降りる。暗い夜道を数メートル空けてついていくと家に入ってしまった。鍵をかけられる前に無理矢理押し入る。女は走って二階の部屋へ逃げていく。撃ちながら土足で駆け登ると、奥の扉から異臭がした。そこに隠れたらしい。

つかつか歩きドアを勢いよく開けると、散乱したゴミに埋もれるように座イスにもたれた男がいた。その顔にもオニマークが付いている。

横の女はお兄ちゃんお兄ちゃんと叫んで揺すっているが、その男は眠っているのか起きない。

俺はオニたちの額を狙って正確に撃った。

脂肪遊戯(前書き)

食わない、食います、食う、食う時、食えば、食え！ 迷わず食え！

脂肪遊戯

はよダイエットせんとダイエットせんとつて垂れ流し続けるキヨちゃんに「そげんこつせんでもビューティホーばい美しか」ってルーチンワークと化したやりとりを言つてやつたりしとつたんよ。

やけどあん娘いつちよん聞かん。聞きんしゃらん。しゃりんしゃらん。もう痩せたくて痩せたくて仕方ないとか言つばつてんえらい食欲で食べよるとー。

そんな感じなのに、ウチが太るんをいつちよん気にせんで食べよつて見たら「フクちゃん、もうちよい痩せたら可愛いのにな」とか言う。

ウチはキヨちゃんの頬をむにいつて引つ張る。

グランデなお世話すぎやる。この豊満で母性溢れる肉体美が甘えん坊男子に好かれるつたい。

ですがキヨちゃんは痩せました。きちんと鎖骨が出てきたし丸みを帯びとつた肉は姿を変えどどん凹凸を増しました。

「別に何もやつてないけど？」

バカな、何もせず痩せるだと。ああ肉い。肉たらしい。いちいち視界に入る痩せた肉が。

昼休み、そんなキヨちゃんは弁当をモリモリ食べる。その後ろに見えるポスターは、真つ赤な背景に倒れた牛を置いて「老いた国の堅い頭と重い腰はいくら死ねば動く？」と、この前の牛伝染病問題での国の対応を批判しとる。そんなのが教室の後ろに何十枚も貼られとつて真つ赤に侵略されとる。

ばつてん目の前ん弁当には輸入モンか知らんけど一応アスパラの牛肉巻きがあるしキヨちゃんはがふがふ食べ続けよる。スペインの猛牛みたいやね。

「そんなに食べて太らんの？」

「やー、家ではなんでかあんま食べる気せんのよね。準備がせから

しいし、一緒に食べる人がおらんけんかね」

ニタツと笑うキヨちゃんを見てウチはちよつと嬉しい。昔からキヨちゃん家は両親が共働きであんま家におらんけん、よく一人でご飯を食べとった。高校に上がってからは両親が揃って引越してつて てかキヨちゃんがこつちに一人残った。

「家でもちゃんと食べんと」

「フクちゃんみたいになれないぞつて？」

ウチはキヨちゃんの頭をどついた。

それからウチは風邪をこじらして学校はしばらく休んどつたんばつてん、久しぶりに登校したらキヨちゃんは「キヨちゃん？」つて感じにオカツパ頭にこけた頬でオツパイもないし可哀相なくらいガツリガリやん。ウチの適度にサシの入ったりブロースを分けてあげたいよ。

「大丈夫？ ご飯食べとつと？」

「う……ん、あんま食欲ない」

聞けば最近学校でも食べとらんらしくて、まさかウチと一緒に食べてあげれんせいかとも思ったけどキヨちゃんは別にそげん友達おらん人とかでもないけん自分の驕りを反省した。

んで、ウチが休んどる間に起こつたのは担任の棚井が真顔で教室の後ろに貼られたポスターを破いたこと。

「これは『敵』が作つたポスターよ、惑わされるんじゃないの。あの牛伝染病は『敵』が広めたもので、政府を批判して国民に不信感を植え付けるための作戦よ。国民が国を信じなくなつたら終わりだから……」

この国はかなり昔から戦争中なんやけど「敵」も「勝ち負け」もよくわからんまま、とりあえず擬態して人間に紛れこんどる「敵」を殺しとる。棚井はそのポスターは「敵」のものやって言つたみたい。

念入りに貼られて剥がせんポスターもあつたけど、そういうのはブルーシートが被せられて教室の後ろは真つ青。

赤青。

なんか異様な状況。

昼ご飯をキヨちゃんと食べようとするけど、なんとなくウチも食欲がなくて弁当をしまった。彼女は言わずもがな。

学校が終わって家に帰ったら、やたらお腹が鳴ってすぐ弁当を温めて食べた。腕まくりして、あの娘が好きな大葉を薄切りの豚肉に挟んで何層も重ねて塩だけかけた。衣をつけて揚げると一気に香ばしさが漂う。油をきって端を包丁で一口大に切っておろしポン酢で味見。

ザクツ。じゅわ。

衣に閉じ込めた大葉の香りが鼻を抜ける。おろしポン酢に絡んだ肉汁が舌に広がる。うまい。すぐにもう一切れ口に放り込んだ。

咀嚼は記憶中枢を刺激するね。

キヨちゃんの身体。服の上から肋がわかるし、あの娘の腕とかほきんて折れそうな小枝。背も低くて気づいてもらえんけん亡霊みたい。

「余裕のないのはすぐ駄目になる。身体にだって脂肪っていう遊びが必要なんよ。脂肪遊戯」

ウチは出来立ての料理を抱えてキヨちゃんの家に行った。インタ―ホンを鳴らしたら出てきた彼女は青白い顔。

入ってびっくりした。暖色系でまとめられとったはずの部屋は壁から小物まで全部真っ青なんやもん。

「いつからこんなことしとるん」

「やー、担任の棚井が家庭訪問に来た時に……『痩せたい』って言うたら色々貸してくれたんよ。他に精神を落ち着けるお香とかね。ここんとこよう来るよー」

ウチはケータイで連絡してキヨちゃんの手を引っ張って、家を出た。ウチン家で食べようと思ったんよ。こんなところでメシがうまくいわけないやん？

ドアを開けると棚井がおった。

「ひっ」

ばってん縛られとったね。ケータイで近所の半軍人コミュに「敵」を知らせたら、調べてすぐにやってきて捕まえてくれた。押さえられとう棚井は呪詛の言葉を吐きよった。

一般人と軍人の中間　半軍人は、棚井について説明した。

「あれは『敵』の中でも厄介な色彩士という奴だね。もってもらしいことを言って、対象の周囲に強い食欲減退効果を起こさせるものばかり配置するんだ。もう何人も、なんとなく食欲がないって言いながら餓死してるんだよ。全く、こんな奴を教師にするなんてこの国はとことんクソだな」

半軍人は笑いながら言って、棚井の頭を銃で撃ち抜いた。乾いた銃声と湿った飛沫の音。ウチらは目を見合わせてすぐにウチん家に行った。

キヨちゃんをテーブルに座らせて、塩こんぶ和え白菜と大根の味噌汁と飯をよそいながら頭ん中で色々考える。

誰が「敵」なんか。

「敵」とか本当におったんか。ばってんとりあえず、何よりご飯を食べるのがいつも先決。

食卓にミルフィーユカツも含めて全て並べた。キヨちゃんはカツガツ食べた。身体にご褒美をあげるみたいに、飯の一粒一粒を味わうように。

「……あ、うまい」

彼女は気づいたように言った。

「なんかかかってんのこれ」

とにかく友達が元気になって嬉しい。ウチは、まー自信満々に答えたね。

「やさしい友達の愛がかかっておる！」

人形劇戦区（前書き）

一人死ぬ。それが「敵」だったら、みんな、安心する。

人形劇戦区

久しぶりに近所にサーカスが来た。かび臭いテント内は盛況で、息苦しいほどの満席。しかし私の席はきちんと用意されている。座るとすぐに幕が上がり喧しいベルが鳴る。時間はどうやら丁度よかつたらしい。

「皆様、開演の時間でございます」

泣いているのか笑っているのかわからない仮面を着けた女が人形を抱え、光の下に現れた。

「ようこそようこそ。待っていましたよ、あなたが、あなたが、あなたが来るのを。さて劇を始めましょうねえ。その昔のことですよ」

俺は腹話術士だ。でも「敵」じゃあねえ。濡れ衣で追われてるんだ。助けてくれ。

小柄の老人ヤマモトが肩で息をします。その姿はボロ雑巾のようで フフツ どうやら命からがら逃げてきたところらしいのですねえ。

声をかけられたもう一人の男は彼を訝しげな瞳で睨みました。細身のスーツが逆三角の体軀を強調しております。ポケットに両手を突っ込んだまま答えました。

そいつはアクシデンタルかつストレンジな話ですね。今この市に「敵」が一名潜んでいる。腹話術士は その「敵」を除くとたった一名しかいないはずなんですがね。

スーツ男はナイフを抜いて相手の首に突き付けました。つまりこの私しか。

キクチは刃を頸動脈へ刺しますが、ぷつりと糸を切るような妙な

手応えしかありません。すぐにそれが人形であるのに気付く。周囲に目をやるが本体はおらず、複雑な装置を内蔵した抜け殻はわざとらしく口をぱくぱくさせて話しておりました。

そりゃあこっちの台詞だあ。俺も「敵」じゃない腹話術士は俺しかいないって聞いてんだ。ってことはお前は「敵」だあ。「敵」なら死ねよう。死ななきゃおさまんねえよう。俺がどんだけぼろくにされたかよう。

声に恐怖。肌が粟立つ感覚にキクチは思わずのけ反りました。すぐに頭ほどの石が降ってきて、地面で割れ散ります。どこから投げられたものかはわかりません。しかし誰からかはわかるのですねえ。ヤマモトは声色を変え、おお敵がいたぞうと叫ぶ。それは人形からでも傍の茂みからでもなく。あたかも遠くで「敵」を探しつついていた半軍人たちの一人が口にしたようでした。

キクチと人形を取り囲み人だかりができ。半軍人は老若男女が入り交じり一般人とほとんど区別が付きません。その違いを一つあげるなら、皆一様に銃を構えていることとございます。キクチの額に赤い点がぼつりと浮かび。

ああ、万事休すの深呼吸。

キクチは両手の人差し指を立て「観客」に向かって微笑みます。それからカメレオンが杖を渡るように、とてもゆっくりと歩きだします。「観客」は銃を構えつつ、気圧されて退くのです。

皆様はオールモスト・ライトですが一つだけ見落としていることがありますよ。それはこのボディこそデコイ（囷）だという可能性。私は腹話術士。どこからだって誰が話しているようにも声が出せるのです。アハハ、たった今、本体は逃げながら皆様にこうして話し続けているというわけですね。

一瞬、半軍人たちの照準と瞳がぶれる。

キクチはすかさず傍の茂みに飛び込みます。斜面を丸太のように猛スピードで転がり落ちていき。急に道が途切れて放物線を描き、遙か下の神社に落下しました。砂利がクッションとなってはいまし

だが　ククツ　俯せで微動だにしないのです。

屋根の雀が二羽、きちゅんきちゅんと囀り合っています。とてもとてつもなく平和な光景。

……おう、生きてるかあ。すんげえ逃げ方すんなあお前。

静かな境内、降りてきた一羽の雀が話し出しました。ヤマモト本人の姿はありません。奇妙なことに、声はキクチの傍の雀から出ているのです。

俺は本当はよう、お前さんが「敵」かどうかなんてどうだっていいんだなあ。

雀は首を傾げ、クチバシを動かして続けます。

ただ腹話術士が一人死んで、そいつが「敵」だったってことにしとけば皆が安心するだろお？　この市に一人「敵」がいるってのは嘘かもしんねえ、本当はいないのかもしんねえ、仲間割れさせんのが目的かもしんねえ、でも皆が安心すんだろお？　他の腹話術士が助かるだろお？　お前さんもこの国の人間ならわかるだろお？

それきり雀は飛び去っていき。キクチは逡巡して拳を握りました。恒常的戦争状態が続いているこの国は、もはや何が「敵」でどうなれば「勝ち」なのかすらよくわからなくなっているのだから。腹話術士は元々「敵」の職業が起源だとされており。よって今でも「敵」だとされやすくあるのでございます。

痛む身体を動かしながら寝返りをうち、目を開き。大音声を張り上げる。

さあ殺してください！　あなたの言うことはオールモスト・ライトだと思えますよ。「敵」を規定して殺す。本当は誰だっていいんでしよう。殺してください。しかし私が気にいらないのはあなただ。他の腹話術士が助かるという言い方はおかしい。あなたが助かるんだ。あなたが助かりたくて私を殺すんだ。これこそ愉しい戦争ですよ。そして戦争の裏で何が起きているか誰も知らないままスケープゴートを輩出して日常は続いていく！

最後の方は殆ど絶叫に近くありました。

地蔵の陰から恐る恐る少女が出てきました。雑草のように無造作な髪は目を隠し。だぶついたTシャツで左肩が見えてしまっており。短パンからのびた脚は細く未発達でございました。

数十分後、キクチとヤマモト 中身の少女姿で が暗い林から浮き出るように現れました。半軍人たちが通り掛かるのを待っていたのでございます。

聞いてくれい。さっき気づいたが、俺もこいつも「敵」じゃあねえんだあ。俺たちを見てくれ、顔の上にオニマークが出ねえんだよう。

銃を向けられ動揺しつつ、寄り添った二人は必死に説明をして。キクチは口を開く。

腹話術士は滅多に素顔を見せないんですよ。それがこうしてやってきているんです。聞いてください。

半軍人たちが近づく。と、先頭の男が悲鳴をあげました。そうして逃げ出した者を見た者がまた逃げ出す軽いパニック状態へ陥ったのでございます。キクチは心底楽しそうに眺めておりました。

一人が微笑するキクチに向かって叫びます。

こいつ、死体を人形にして腹話術を……。

光を当てて見ればヤマモトの目は虚ろに落ち窪み、死後硬直で脚はぴんと張り詰めているのでございます。奇ッ怪悪趣味ここに極まれりと。

やだなあ、お茶目なジョークですよ。「敵」を捕まえたから殺して連れてきたんですよう。腹話術士をなめるなっことですよ。

キクチは腹を抱えて大音量で笑い。半軍人たちはそのビリビリと響く声に、怯えたシマウマのような有様。他者の狂気は人を正気にするのでございます。

ちよつといいか。

半軍人の中から眼鏡をかけた男が現れヤマモトの死体に向けて発

砲しました。脚を貫通した弾丸は死体を跳ね上げましたが、ゆっくり血が出てくるのみ。

確かに死体だな。じゃあ受け取りだ。オニマークが出なくても認定されるだろうさ。

眼鏡の男は死体を抱えて運んでいきました。他の半軍人たちも引き揚げていき。ただ一人残ったキクチはため息とともに歩き出しました。

しかし背中から撃たれ足がもつれて転んでしまったのでございませぬ。

人形を操っていた手を止め、仮面の女は笑い出した。場内は静まりかえる。目線がどこにあるかわからないが、私を見ているように思えた。

さあ、誰がキクチを殺したんでしょうねえ。

楽しそうに呟いて、銃と弾丸入れをぼおんぼんとお手玉する。闇に紛れるその光沢は半軍人に支給されるタイプのものだ。私の顎に冷たい汗が流れていった。

待ってましたよ、ここに来るのを。言ったでしょう、腹話術士をなめちゃいけませんと。あの身体はデコイだったのですよ。

私は席を立つと他の観客を尻目に出口へ急いだ。しかし眼鏡の男が立ちはだかる。あの時 ヤマモトの死体を撃った男だった。

思惑通りにいって良かったなあ。「敵」がいるって噂を流して、市の腹話術士を全滅させるつもりだったんだろ。嫌われたなあああ。腹話術士がいるのは市の外聞が悪いのかなああ。

わざと老人のような声を出しているので気付く。それはヤマモトの声だった。

腹を割って話しましょうよ、市長さん。

過剰なまでに艶かしい声で仮面の女 キクチは私の肩を叩いた。

私は口を開きかけたが、言葉は形のない断末魔に変化した。自分の腹から黄色い腸がぞるりと垂れ落ち、濁流のように血が、血が、血が……。

どうやら市長にも腹を割って話して頂けたようでございますねえ。キクチが持っているのは、血のついたナイフだ。銀と赤のコントラストがスポットライトに輝いていた。

さてさてお名残惜しいところではございますが、皆様、ショーはお楽しみ頂けましたでしょうか。市長、いかがでしたか。

ああ、感動したよ。面白い催しだった。呼んでくれてありがとう。腹話術士は勝手に私の手を取り握手して　勝手に私の声で賛辞を述べていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6259n/>

不真面目偽々戦争

2010年10月8日14時21分発行